今月のことば　　**平成20年 8月**　　<No.24>

「いやし」と「すくい」

一年の中でも暑さがピークを迎える８月なかば。私たち日本人は、浄土に往生された親しい方々をしのぶ「お盆」という尊い習慣を、大切に守ってきました。

亡くなった方をしのぶとき、どうしても「悲しい・寂しい」といった感情が一緒にわいてきます。そうした悲しみにくれたとき、人は悲しみをいやしてくれるものを求めます。今、ちまたには「いやし」がブームのように氾濫しています。しかしその「いやし」と、「仏の救い」とは、中身が違うと、あるご講師に教えていただきました。

暑い日に、クーラーのよくきいた部屋に入る。気持ちいいですね。それが「いやし」です。クーラーは「涼しい」という心地良さを一時的には与えてくれますが、暑さのなかにあっても生き抜いていく力を、私たちに与えてくれることはありません。

それに対し、暑い中にありながらも、作物を育ててくれる太陽の恵みを喜べること、はたらいて汗をかき、生きる悦びを感じられることが、宗教的な「救い」です。

浄土真宗の開祖・親鸞聖人はその著書『教行信証』の最後に、七高僧の一人・道綽禅師（どうしゃくぜんし）の、次のようなことばを引用されています。

前に生れんものは後を導き、後に生れんひとは前を訪へ
連続無窮にして、願はくは休止せざらしめんと欲す

「先に浄土へ往生した者は後の者を導き、後に往生する者はまた、先の者をたよりとしていきなさい。そうすることで、仏の救いの教えがとぎれることなく受け継がれていきます。」

愛する方、親しい方と今生の縁つきることは確かに大きな悲しみを伴います。しかし、その方の人生（生そして死）に教え導かれることによって、私たちはいただいた尊い一つの命を、精一杯生きることができるのではないでしょうか。

たとえ悲しみの中にあっても、命いただいたからこそ味わえる喜びに出会うこと。それが宗教の救いであろうと思います。そうした「救いの教え」をとぎれることなく受け継いでいくことの大切さを、この機会に改めてかみしめたいものです。

慧日山 真光寺